

東京古書組合の百年

組合はなぜ百年続いたのか

まず自己紹介

- 1983年、目黒区駒場に開業
- 五十嵐書店で修業 オーソドックスなパターン
- 場所柄、学術書が中心の品揃え
- 仕入れの難しさから洋書を扱うように

オヤジさんの アドバイス

- 古本屋は一にも二にも立地
- 三日で月の家賃を稼げるか
 - 当時すでに実際的ではなかったが
- 郊外店は「売れる店」より「買える店」
 - 良い仕入れに恵まれることが成功の条件
 - 「市場」の存在
 - 結局このいずれからしても、オヤジさんのお眼鏡にはかなわなかったが、我を通して、最後には認めていただく。
 - 正解であったか否かは、今でも判断がつかない。

当時の業界

- 1983年
 - 経済不況が当業界にも波及し、交換会取引の低迷。本部交換会通常市会は前年度額を維持できたが、地区交換会の取引の後退が顕著となる。
- 1985年
 - 「増税なき財政再建」の緊縮財政の中で文教予算も据え置かれ、業界が数年来の営業不振から脱却できずに低迷する中、出来高は本部・地区交換会とも前年度を若干上回り、上昇傾向に転じる。
- 1986年
 - スーパー等での即売展の開催点数は増えるが、マンネリ化による売上の減少と経費の増大で苦しい状況。
 - 『東京古書組合百年史』『組合史略年表』より

チリ交さんの 時代

- 70年代後半頃から、古紙相場が上昇
- ゴタ(書籍類)でも良い値になる
- 古本屋に持ち込めば、さらに良い値になる
- 古紙回収業者の増加、古書店を開く人も
- 重要な仕入れルート
- 本を古紙として出す人が増えてきたことの表れ
- 本は足りないものから余るものに
- 古紙相場下落に伴い組合にツブシ問題
 - 1993年 ツブシ処理有料化

コミックブーム

- マンガ専門店の出現
- 「マンガ喫茶」のチェーン展開
- 卸専門業者の組合加入
- 市場の扱い量を押し上げる
- 1988年 本部交換会最低値1000円→2000円
 - マンガ、コミックや嵩物の本部交換会への集中を地区交換会に分散させることも、その目的の一つ

「外部」の強大化

- 消費財としての本の氾濫
- 1991年 ブックオフ創立
 - 「本は腐ります」(同社某店長)
 - 古本屋は3K(ネガティブキャンペーン)
- 1992年 組合出来高下降始まる
- 2000年 アマゾン日本版サイト開設
- 「パラサイトビジネス」
- 2000年 循環型社会形成推進基本法→3R

組合とは

- はじめに「市」があった 独立した商業組織
- 「市」を取りまとめる役割として誕生
- 商業組合→統制組合
- 組合が市を直営
- 戦後、協同組合(1947年)へ
- 経理の健全化、組織の近代化
- 組合員となる条件は店舗を持つこと
 - 後に撤廃、営業所のみでも可能に

市場とは

- 競争というシステム フリと入札
- 売り手にも買い手にも利益
- 市会にも利益
- 業界全体にとっても利益
- 長く組合の存立基盤として唯一無二のものであった

市場の変遷

- フリから置き入札へ ヤマ帖から封筒へ
 - 出品→荷出し→フリ→ヤマ帖→ヌキ→清算
- 置き入札の手順
 - 封筒付け出品→入札→開札→計算→清算
 - 出品→仕分け封筒付け→
- 取引量の増加に対処
- より公正な仕組み
 - ただし短所もある
- さらなる取引量の増大に対処するためOA化を模索

現在に至る道

- 1990年 「新しい清算制度」
- 1993年 今後十年を目処に再建築を目指す
- 1994年 夏期古書セミナー
- 1996年 活路開拓ビジョン調査事業報告書「東京の古本屋」
- 同年 インターネット「日本の古本屋」サイト立ち上げ
- 1998年 交換会OA化等検討
- 1999年 共同事業「日本の古本屋」
- 2000年 建設実行委員会
- 2001年 「高度化事業」承認
- 2003年 新古書会館竣工

なぜ神田か

- 広い会場、流通拠点となる会場を求める意見
- ではどこに？となると決まらない
- 大量出版物の二次流通が組合の本旨ではない
- 元来出版産業とは共生関係(cf:パラサイトビジネス)
- 新たな価値を発見・創造する場としての交換会
- 「組合」を発信するための「会館」

組合のIT化

- 2004年 組合エクストラネット運用開始
- 2009年 組合員基本台帳完成
- 2010年 「ネット入札システム」の出品登録システム完成
- 2012年 全古書連総会歓迎デジタル大市会
 - 出品、入札、開札、計算、清算まですべてデジタル処理
 - ただし通常の市会での実用には多くの課題

これからの 市会

- さらなるシステム化による合理化の可能性
 - 例えば入、開札のデジタル化
- 市場を使わないネット市会の試み
 - コロナ禍の経験から必要性を認識
- しかし現物を手にすることでしか評価の測れないものも多い
- 市場の重要性は不変
 - カーゴ数十台という大量出品への対応
 - 貴重な資料の散逸を防ぐ

日本の古本屋

- 組合がBtoCを運営することの難しさ
- ネット社会の進化についていけるか
- 顧客対応という問題
- いかに全体の利益につなげるかも課題
 - 値下げ競争からの脱却
- しかしすでに収益の大きな柱
 - 組合にとっても、組合員にとっても

組合は 不滅か

- 『古書店地図帖』(1967年)からみる組合員の姿
- 神保町は93軒→128軒
 - ただし当時から存続している店は44軒
- 本郷は51軒→20軒
 - 存続組は14軒
- 早稲田は33軒→22軒
 - 存続組は8軒
- 東京全体では776軒→574軒
 - 存続組は125軒
- 百年を生き抜いた店はほんの一握り
- 逆に言えば、常に新たな参入者がいた
- 組合はそのどちらのためにもある

古書店地図帖

- 1967年発行の『古書店地図帖』
- 紀田順一郎さんの編集
- 図書新聞社が発行
- 旧古書会館竣工記念として組合員に配布された
- 『地図帖』に掲載された東京古書店数は776軒
- 現在『日本の古本屋』で検索できる東京組合員は574軒
- 比較のための留保
 - 前者には組合非加盟店も含まれるかもしれない
 - この間に加入し、脱退した数は把握できない
 - 移転の場合も比較に含まれない
 - 正確な数ではなく大まかな動向として

古書店街の 変遷

「古書店地図帖」(1967年)と「日本の古本屋」を比較

		1967年	2022年	存続	転廃業	開業
千代田区	神保町	94	128	44	-50	84
	その他	9	3	0	-9	3
	計	103	131	44	-59	87
文京区	本郷	51	20	14	-37	6
	その他	19	13	0	-19	13
	計	70	33	14	-56	19
新宿区	早稲田	33	22	8	-25	14
	その他	40	8	2	-38	6
	計	73	30	10	-63	20

郊外店の変遷 中央線支部

「古書店地図帖」(1967年)と「日本の古本屋」を比較						
		1967年	2022年	存続		転廃業 開業
中野区		27	20	3		-24 17
杉並区	高円寺	12	12	1		-11 11
	阿佐ヶ谷 荻窪	17	15	3		-14 12
	西荻窪	12	12	2		-10 10
	その他	7	9	1		-6 8
武蔵野市		14	11	2		-12 9
	三鷹・小金井	5	16	1		-4 15
	国分寺・国立	8	6	0		-8 6
多摩ほか		8	65	1		-7 64
		110	166	14		-96 152

郊外店の変遷 南部支部

「古書店地図帖」(1967年)と「日本の古本屋」を比較

	1967年	2022年	存続	転廃業	開業
中央区	8	13	0	-8	13
港区	19	12	4	-15	8
渋谷区	25	11	3	-22	8
目黒区	27	14	7	-20	7
世田谷区	40	34	5	-35	29
品川区	27	9	2	-25	7
大田区	39	12	2	-37	10
	185	105	23	-162	82

郊外店の変遷 東部支部

「古書店地図帖」(1967年)と「日本の古本屋」を比較

	1967年	2022年	存続	転廃業	開業
台東区	23	15	3	-20	12
墨田区	17	3	0	-17	3
荒川区	18	10	3	-15	7
江東区	14	11	1	-13	10
足立区	18	6	1	-17	5
江戸川区	7	8	0	-7	8
葛飾区	33	8	3	-30	5
	130	61	11	-119	50

郊外店の変遷 北部支部

「古書店地図帖」(1967年)と「日本の古本屋」を比較

		1967年	2022年	存続	転廃業	開業
豊島区	池袋	25	5	1	-24	4
	その他	15	1	1	-14	0
北区		22	6	2	-20	4
板橋区		27	10	2	-25	8
練馬区		16	26	3	-13	23
		105	48	9	-96	39

結びとして

- 持続可能性のキーワードは「平等性」と「多様性」
 - そしておそらくは「柔軟性」
- 「多様性」は古くからあった
 - 商品も人物も
- 「平等性」は市場のシステム変革の中で獲得
 - 少なくとも入札においては何人も平等である
- これからも時代に即応する柔軟性を持ちうるか
- 「儲かりそうではないが面白そうである」
 - アンケート「なぜ古本屋になろうと思ったか」